



## 博多遺跡221次調査出土人骨の発掘調査

文化財調査法開発部門  
舟橋 京子

福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課により、令和元年より行われている博多遺跡群第221次調査は、博多区上川端町の冷泉小学校跡に位置します。この場所には、806年(大同元年)に空海により開基された大乘寺が、1920年(大正9年)まで存在していたことが知られています。この調査区から、11世紀後半-12世紀前半の石積遺構が出土しており、中世当時の海岸線に沿って築造された当時の護岸施設の可能性が指摘されています(福岡市経済観光局現地説明会資料より)。一方で、同じ調査区から、中世墓および大乘寺に伴うと推定される近世墓が多数検出され、墓の中からは多数の人骨が出土しました。人骨の発掘調査には本学の文学部・共創学部・人文科学府・地球社会統合科学府の学部生・大学院生および本センター専任教員の田尻義了准教授(文化財調査法開発部門)、九州大学総合研究博物館の米元史織助教(センター発掘調査社会連携部門)、舟橋が参加しました。ここでは、人骨の発掘調査の概要について紹介します。

近世墓から人骨が検出され始めた令和元年秋に福岡市より本センターへ人骨の発掘調査依頼があり、本センターが人骨の発掘調査に携わることになりました。人骨の調査は、令和元年冬季より令和3年末まで新型コロナ禍の緊急事態宣言の空隙を縫う形で行われました。現地では本学の学生・教員が人骨の検出、埋葬姿勢の精査、人骨出土図の作成、人骨の取り上げ作業にあたりました。

江戸時代の一般的な葬法は、土葬ないしは火葬であり、遺体および人骨の埋葬容器としては、陶製の甕・木製の桶(いわゆる早桶)・方形木棺(坐棺)・長方形木棺(寝棺)が知られています。本遺跡の調査区では火葬は確認されておらずほぼ土葬であり、これらの埋葬容器のうち方形木棺以外が確認されています。早桶や長方形木棺墓に関して

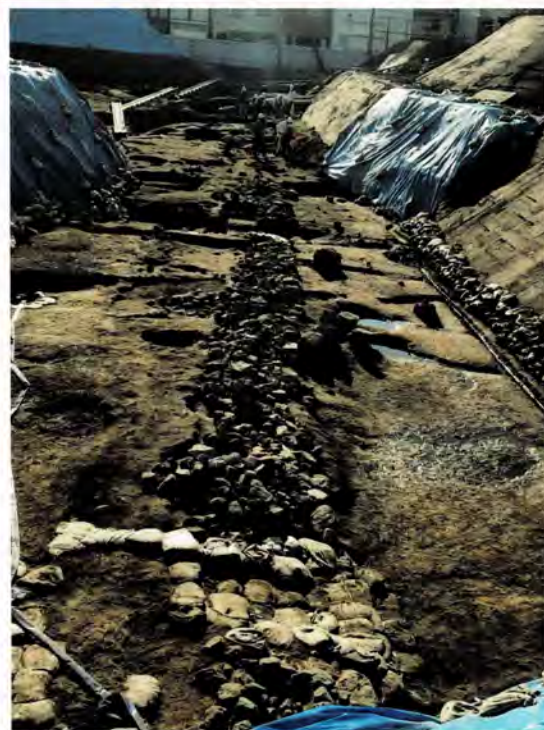


写真2. 中世船着き場遺構

は板材そのものが確認できた墓もあります。墓地のより上層からは肥前甕を用いた墓が多く検出され、下層になるにつれて、早桶や、長方形木棺が多く検出されています。これらの埋葬容器の中からは、立膝で座った状態のいわゆる坐葬や、四肢を屈して身体を横に向けた側臥屈葬、同様に四肢を屈して仰向けの状態の仰臥屈葬などの姿勢で埋葬されていたと推定される人骨が出土しています。一方で、埋葬後に改葬或いは攪乱により遺体・人骨が二次的に動かされた痕跡の認められる墓も複数検出されています。また、人骨に伴い、遺体に副葬していたと考えられる漆器・陶器・土師皿・六銅銭・鉄製品など近世墓に特徴的な副葬品が数多く出土しています。中世の墓も複数基検出・調査されました。中世墓からは中世に特徴的な仰臥ないしは側臥屈葬の姿勢で木棺に埋葬されていたと推定されるような人骨が出土しています。

本遺跡のような中世から続く近世地方都市の墓地の発掘調査はそれほど類例が多くなく、中世・近世の葬送行為の時空間的変容を明らかにする上で非常に重要な遺跡になることは間違いありません。加えて、出土した人骨そのものの分析結果すなわち形質的特徴・病気・生前の活動負荷など自然人類学的情報からは、中世・近世の博多に生きた人々の様子をうかがい知ることができると期待しています。



写真1. 近世墓出土人骨発掘調査風景



屋島は四国北東部の香川県高松市内に位置し、屋根のような形状から市のシンボルとなっています。現在は陸続きとなっていますが、かつては瀬戸内海に浮かぶ島の一つでランドマークとなっていました。その特徴的な形状は古くから人を惹きつけ、数多くの歴史舞台となりました。代表的なものでは、古代山城の屋嶋城跡、鑑真が創建したと伝えられる屋島寺、源平合戦屋島の戦いの古戦場跡が挙げられ、国史跡に指定されています。また、典型的なメサ地形であること、世界的に稀な讃岐岩質安山岩(サヌキトイド)を産することから天然記念物にも指定されています。さらに、瀬戸内海国立公園にも指定されているように、屋島には史跡・天然記念物に加え名勝としての価値もあります。以上の価値を顕在化するため、高松市は平成6年度から屋島基礎調査事業として様々な観点から文化財の調査を行ってきました。平成30年度からは基礎調査事業の一環として、近世から近代に屋島で営まれた石材業に着目し、「石材産地としての屋島」の価値を明らかにすることを目的として九州大学アジア埋蔵文化財研究センターと高松市で共同調査を開始し、平成31年4月には学術交流協定を締結しました。

なぜ石材業に着目したのか、というと屋島および周辺地域の特徴的な地質にあります。屋島の地質は花崗岩・凝灰岩・安山岩で構成されており、基盤岩である花崗岩の上に約1,400万年前の瀬戸内火山活動によって形成された岩石(瀬戸内火山岩類)である凝灰角礫岩と讃岐岩質安山岩(サヌキトイド)がみられます。屋島と類似した地質は、屋島周辺の女木島・男木島・豊島・小豆島でも確認でき、特に豊島と小豆島は全国的に有名な石材産地でした。例えば、豊島の凝灰岩は江戸時代から非常に有名で、産地の名前をとって別名「豊島石」とも称され、『日本山海名産図会』(1799年刊)にも紹介されています。熱に強く加工がしやす



写真. 屋島調査風景と花崗岩に残された矢穴跡

いことや独特な色調から燈籠や井戸杵、カマドなど様々な製品に加工されました。また、屋島の東約1kmの場所に五剣山という花崗岩の石材産地があり、近代から石材業が盛んです。色合いが美しいことから高級石材として有名で、産地の名前をとって「庵冶石」と称されます。このように屋島周辺には日本を代表するような一大石材産地があり、屋島はそのような産地と同様な地質であるにもかかわらず、これまで屋島の石材業についてはあまり知られておらず、記録や記憶にも残されていませんでした。一方、屋島には花崗岩と凝灰角礫岩の採石場(丁場)跡が残っており、石材業が営まれていたことが確認できます。そのため、これらの丁場跡を調査することで屋島の歴史に新たな価値を付け加えることができるのではないかと考えました。

本調査の目的は、屋島に残されている丁場がいつ利用されたのか、そして石材が何に利用されたのかを明らかにすることです。共同調査は、丁場跡の分布調査や発掘調査、遺構の測量調査などの考古学的調査を高松市が行い、岩石学的分析を当センターが行うという分担をしています。具体的な調査事例として花崗岩の調査をみてみましょう。花崗岩は巨大な露岩に矢穴を列状に掘り、矢を入れてハンマーで叩き割るという方法で採石されていました。そのため矢穴跡が残る石が多く残存している場所は丁場である、ということがわかります。さらに矢穴の大きさによって時期が判別でき、古くなるほど矢穴が大きくなるということも明らかになっています。そのため、矢穴は丁場の分布と時期を明らかにするための重要な指標になります。屋島では石場地区で古い矢穴を確認していたため、石場地区を中心に踏査を行いました。その結果、石場地区の丁場が江戸時代初頭まで遡り、近代まで継続していたことが明らかになりました。

では、石場地区の花崗岩は江戸時代初頭にどのように利用されたのでしょうか。候補としては高松城の石垣が挙げられます。高松城の石垣は花崗岩で、石垣の中にある栗石は安山岩と花崗岩で構成されています。屋島と高松城は約5kmの距離がありますが、海運を利用することが可能です。高松城石垣は屋島から運ばれたのではないかと、という仮説を検証するため、高松城石垣と栗石、屋島の花崗岩および安山岩の岩石学的分析を行っている最中です。分析方法としては、偏光顕微鏡による薄片観察、XRFおよびICP-MSを用いた全岩化学組成の測定、EPMAを用いた微量元素組成の測定を行っています。これらの分析結果を比較検討し、岩石の産地を明らかにします。分析結果は令和4年度に刊行される調査報告書に掲載される予定です。

## 【センター活動報告・予定】

2021年2月16日

第16回アジア埋蔵文化財研究センター研究会

発表題目:「黒曜石製石器の原産地判別のシステム化構想」

発表者: 隅田祥光(長崎大学教育学部)

2022年3月20日 公開講演会 オンラインZoomウェビナー開催

「商代後期の社会・文化とその変容」

九州大学アジアオセアニア研究教育機構共催

## 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター ニュースレター No. 21

発行: 〒819-0395 福岡市西区元岡744

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

編集: 仙田 量子 発行日: 2022年2月28日

TEL: 092-802-5663/FAX: 092-802-5662

ホームページ <http://scs.kyushu-u.ac.jp/qa3rc/>